

校歌中の「崇文」という言葉について

三中31回 鈴木 博

【一】問題の発端。

ある年の同期会の席で、隣り合った友人から個人的に次ぎのような質問を受けた。

校歌の二番の歌詞中の「崇文（尚武）」という言葉は、
どうして「シュウブン（シャウブ）」と読むのか？

天皇の名前の「崇神・崇徳」などの場合は、「スジン・ストク」
なのに。

至極もつともな疑問なので、早速調べにかかり、その結果を、
本人へはお知らせした。

今ここに書き改めて、調査の経緯を我々の拿寿記念文集に提
出することとする。

【二】校歌の二番の歌詞。

順序として、同期生諸兄が先刻ご承知の校歌の二番の歌詞を、
まず掲げる。

京三中の四つの綱領「誠実・剛健・進取・協同」の、最初の二つが、この二番に詠み込まれている。読み仮名をへゝに入れる。

○誠実天の聖火とかかげ　剛健地へツチの威徳とたたへ
崇文尚武たゞ一途へヒトスジに　競へキホふ姿の雄々
しさ看よや

《注》我々の卒業記念写真帳の最初に、校旗、綱領と共に本校国漢科作として校歌が載っているが、二番の歌詞中の「競（ふ）」の振り仮名が、「きそ（ふ）」とある。が、これは誤りで音譜の方の歌詞を見ると、「きほふ」とあり、我々は「キオオ」と歌っていた。「きほふ」の方が「きそふ」よりも雅語であり、文語調の歌詞として適切である。一く四番の終わりが「ほこり・まもり・ちから・いのち」であるのを、中学時代に順序よく、しっかり記憶した。

【三】天皇名の「崇神・崇徳」等の読み。

天皇名に「崇」の字のつくのは、「崇神・崇峻・崇徳」と、北朝の「崇光」であるが、現代におけるこれらの読みは、通例「すじん・すしゅん・すとく・すこう」であって、「崇」の読みは「す」であり、「しゅう」ではない。

歴代天皇の諡（おくり名）については、参考文献として、帝国学士院編『皇室制度史6』所収の「御歴代天皇御名諡（シ）号追号表」、及び坂本太郎博士著『古典と現代』所収の「称谓（シ

ヨウイニ呼び方)私言」を見たけれども、昔は訓読みの基準がなかったらしく、現存の読み方が昭和一五年に宮内省によって定められた時も、一々の読みの典拠はしめされていない。

《注》我々は昭和八年の小学五年生以降、「国史」の授業を受けて来たが、「崇」の字のつく天皇の読みはすべて「す」であった。その当時の教科書に当たって振り仮名の有無を、念のため確認する必要があるが、おそらく当時の先生所持の教授指導書の方の読みにも、「す」とあったのであろう。

さて、古典の中に見える、上記の天皇名の読み方については、『日本書紀』と「小倉百人一首」と、分類体の故辞書の『下学集』(かがくしゅう)とを見た。

まず本文が漢文体で記されている『日本書紀』中の天皇名「崇神・崇峻」については、岩波書店の日本古典文学大系の『日本書紀』の上二三六頁、下一五四頁に「しうじん・すしゅん」と振り仮名されているのを見ることが出来るが、不統一の感がある。

「しうじん」の方は、おそらく平安時代における『日本書紀』の訓点資料の振り仮名に拠ったかと推測されるが、「すしゅん」の方は拠るべき資料がなく、単に現行の読みに従っただけかも知れない。

「小倉百人一首」の七十七番の、

○瀬をはやみ 岩にせかるる滝川のわれてもすゑに あは
むとぞおもふ

の作者「崇徳院」(一一一九―一二六四)の読みについては、「小倉百人一首」の一四〇六年の古写本に、「崇徳」の右に朱筆で「シユトク」と振り仮名されているので、崇徳院在世中は不明だが、室町期では、

「崇」の字の音読みが、「シユ」であつたと推定される。

さらに文安元年(一四四四)に成立の『下学集』の「草木門」の「柜(キビ)」という言葉に対する漢文体の注記中に、「崇徳院」という三字に対する、振り仮名が見られるが、「崇」の読みは「シユ」である。以下に、この漢文体注記の全文を書き下し文にして引く。振り仮名は括弧に入れる。

☆柜(キビ)

本朝ノ崇徳院(シュトクイン)ノ御宇、保延(ホエン)三年ニ、天ヨリ柜(キビ)ヲ、雨(フ)ラス。其ノ色黒シ。方(マサ)ニ今(イマ)文安元年三月二日ニ、天ヨリ豆(マメ)小豆(アヅキ)ヲ、雨(フ)ラス。世俗以テ之ヲ植(ウ)ユルニ出生ス。

其ノ葉、白膠木(ヌリデノキ)ノ如シ。

天ヨリ草木ヲ雨(フ)ラスコト、其ノ例(レイ)、无キニ非ズ。且(カツ)之ヲ記スル耳(ノミ)。

以上により、「崇」の読みが「崇神」の場合は「しう」（現代語音ふうに記せば「シュウ」）、そして、室町期の文献における「崇徳」の場合は、「シュ」であることが知られる。

《鈴木注》。「シュ」は長音「シュウ」の短音化したものであろう。》

【四】「崇文」の日本での用例探索の必要。

先の質問は、「尚武」という言葉には馴染みがあるが、「崇文」という言葉は聞き慣れない、ところからも来る。

それと通常我々は「崇」という漢字を含む言葉、例えば「崇敬」・「尊崇」などを「すうけい」「そんなう」と読んで、「しゅうけい」「そんなしゅう」とは言わないところからも疑問が生じる。そういう次第で、先の質問は次ぎの疑問①②へと発展する。

① 「崇文」という熟語が日本でつかわれたことがあるのか。

② 「崇文」の読みは「すうぶん」（または「すぶん」）の方が一般的ではないか。がこれらの疑問を解決するためには、先に校歌の作詞者が誰かについて調べる必要がある。

【五】校歌の作詞者。

我々が京三中を卒業した昭和十五年三月の「第三一回卒業記念写真集」の冒頭に先述のように、校歌の作詞者として「本校国漢科作歌」とある。

他方、『同窓会名簿』の「京三中校歌」には「大塚五郎 作詞」

とある。

この食い違いに関しては、後掲の母校の『創立廿五周年記念誌』によつて解明されるが、ここに問題として取り上げる「崇文」という言葉は、漢籍に強い先生によつて採り入れられたものと思われる。

そのように憶測する所以は、「崇」の字音が日本では、慣用的に「スウ」が用いられていて、これを「シュウ」と読むのは中国の漢音によるからである。

【六八】「崇」の字音。

「崇」の中国音は、最近の諸橋轍次博士著『大漢和辞典』でなく、校歌の作成された年に近い頃の漢和辞書、例えば服部宇之吉・小柳司気太の共著『新訂詳解漢和辞典』によれば、漢音が「シュウ・ソウ」であつて、呉音が「ズウ・ズ」とある。

校歌の歌詞において、「崇」の振り仮名を日本での慣用音の「すう」でなく、中国音の「しゅう」にしたのは、「崇文」という熟語が当時、日本ではほとんど使われていなかったからである。

この歌詞のように「文武」両道を尊ぶ意味の四字熟語として、「崇（シュウ）文尚武」を創作する営みは、漢文（漢字音）に滅法強くなければ容易ではない。

では、この語の創案者は誰かということになると、例えば、学

生時代に漢文を専攻した樋口功先生か、喜多尾道誠先生かということになるのではなからうか。

樋口先生は在職期間が大正十年～昭和十四年で、大正末頃から昭和初め頃にかけて芭蕉、俳諧関係の極めて優れた著書が数冊ある。

喜多尾先生は、初代三中校長の中野省吾先生（在職期間は明治四十一年～大正十一年）の、学校玄関前の胸像の誌銘の撰文者であって、その在職期間は、明治四十一年～昭和九年で、我々は残念ながら授業を受けていない。

「崇」の読みは、日本での慣用音としては「スウ」である。

手元にある先引の古い漢和辞書の「崇」の箇所を引くと、「崇文」という熟語はないけれども、この漢字「崇」を含む熟語の読みのほとんどは、「シュウ」である。したがって古くは「崇」の字音は日本でも「シュウ」であったと思われる。校歌制作の頃はそういう時代であったのだろう。

さらに言えば、「崇」の字音「シュウ・ソウ・スウ」の中の「シュウ」を採用して振り仮名としたのは、ひょっとして「尚武」（シヤウブ）との音調上の整合性を考慮したのかも知れない。すなわち「シュウブン」と「シヤウブ」とは、共に「サ行拗長音＋バ行音のブン・ブ」であって、音調上の整合性から好ましく感じられたのかも知れない。

【七】「崇文」の日本での用例と読み。

京三中の校歌の作られた時期よりも少し遅い頃の国語辞書に当たってみると、『大言海』（昭和八年）に、「すうぶん」の読みで「崇文」が見出し語として出ていて、中国古典の『魏志』からの引用がある。

また日本における固有名詞として使われた「崇文館」という漢語が『大辞典』（昭和十年）に、次ぎのように見える。

○崇文館 一宮藩の藩黌。安政年間創立、学問所と称す、明治二年崇文館と改称、廃藩と共に廃止。

《鈴木補記。☆藩黌＝ハンコウ＝藩の学校。

☆この「崇文館」の読みは、この辞書に示すとおりの日本慣用音による「すうぶんくわ（か）ん」であろう。》

『大辞典』には、他に『大言海』とは異なる中国古典等からの引用・説明を載せて「崇文・崇文総目・崇文門」が立項されているが、これらの読みも、すべて利用者である日本人向けに「すう…」である。ただ一つだけ「崇文総目」を、別に「しゅうぶんそうもく」とも読む見出しを立てているのが注目される。

【八】①②の疑問に対する解答。

以上に述べた所により、

先の①の疑問（『「崇文」という熟語が日本で使われたことがあるのか）に対しては、普通語ではなく固有名詞であるけれ

ども、明治初期に一地方で短期間「崇文（館）」という名称が使われたことが明らかになった。

次に②の疑問（『「崇文」の読みは「すうぶん」の方が一般的ではないか）に対しては、「崇文」という普通語としての二字漢語は日本での用例が見つからず、校歌の作成時ではこの語が古い中国語であるところから、「崇（文）」という語を音読みするに当たって日本における慣用音ではおかしいと考え、中国における漢音「シュウ（ブン）」としたのであろう。

この「崇（しゅう）文」という言葉一つだけを見ても我々の校歌は、作詞者の先生方の極めて高い見識によって成ったものであると感じる。

【九】校歌制定に至る過程。

我々の入学以前の昭和八年十二月に『京都府立京都第三中学校創立廿五周年記念誌』が発行された。

その編集係長は樋口功先生で、係が次の諸先生方である。

★長島正輝先生。在職期間が大正十年～昭和十年で、我々は授業を受けず。

★山村湖四郎先生。在職期間が大正十二年～昭和十七年で、英語の授業を受けた。

★岩見護先生。在職期間が大正十二年～昭和十七年。のち大谷大学教授。私は一年生の時の国語の授業で、「外国・結果」

等をグワイコク・ケックワ等と読む指導を受けた。この力行拗音の「クワ」は、ご出身の能登半島の方言音だったのか。それとも昔の発音通りの読みをご指導いただいたのだろうか。

★大塚五郎先生。在職期間が昭和四年～十七年で国語を教えただき、担任もしていただいた。著書に歌集「山原」・随筆「京都風土記」など多数がある。

その『創立廿五周年記念誌』によれば、四綱領の制定は昭和五年九月二十九日、校歌制定は七年一月でその制定過程は次ぎの通りである。

○本校歌は、同窓生、在校生、及び職員より募集せる数種の稿案を参考資料とし、本校国漢科担任職員の合評取捨と、校歌委員の採択精校とを経て成れるものにして、評校に供する原案の作製は大塚教諭主として之に当たれり。

歌曲は東京音楽学校教授信時潔氏に依頼して作成せられたるものなり。

上の説明によって我々は校歌の作詞者が「国漢科」の先生方であったり、大塚五郎先生であったりすることが納得出来る。